

## 知的障害を伴う自閉症児の実態を踏まえた音楽の授業づくり（2）

集団への参加が難しい児童の指導に焦点をあてて

○山地康代（静岡県立伊豆の国特別支援学校） 久野智宏（筑波大学附属大塚特別支援学校） 工藤久美（筑波大学附属久里浜特別支援学校）  
KEY WORDS: 自閉症 自立活動 音楽の授業づくり

### 【目的】

知的障害を伴う自閉症児童の中には、興味・関心が限定されており、人に関心を向けることが少なく、集団の学習に参加することが難しい児童がいる。そのような児童が、集団の音楽の授業の中で、提示された教材を見るなど徐々に参加できるようになり、教師と一緒にリズムを表現する、楽器を操作する、友達と一緒に楽器を演奏するなどの変化が見られるようになった。本研究では、同時期に並行して行っていた自立活動の指導内容にも着目し、集団の音楽の授業での変容と関連付けながら、集団の授業へ参加することができるようになった要件を明らかにすることを目的とする。なお、本研究対象児の保護者より、研究発表の承諾を得ている。

### 【方法】

（対象児）対象児は知的障害を伴う自閉症の小学部 6 年生の女児である。文字積木を組み合わせて好きな言葉を並べたり、特定の歌を聴いたりすることが好きである。対象児の学習上又は生活上の困難は、友達や教師と活動の場を共有したり、一緒に学習したりすることが難しいことである。教師の誘い掛けを受けると、「やんない。」と言って、靴や靴下を脱いで寝転び、人からの働き掛けを受け入れることが難しい。音楽の授業では、着席することが難しく、動いていることが多い。また、楽器に触れたり、歌詞のスライドを見たりすることが少なく、教師と一緒に物を見たり、操作したりすることが難しい等の様子が見られた。これらの困難の背景としては、伝えたいことが十分に伝えられない、見通しをもって活動することや変化に対応することが難しい、興味・関心が狭いことが考えられた。

（自立活動の指導計画）

時期・頻度：202x 年 6 月～202x 年 3 月、学校生活全体  
目標：①活動内容への見通しをもち、教師と一緒に様々な活動を経験する。②自分の知っている言葉を文字に表したり、言葉で言ったりして教師とやり取りする。

（音楽の指導計画）

時期・頻度：202x 年 6 月～202x 年 3 月、週 1 回、45 分  
目標：楽器の音を聴く、教師と一緒に楽器を操作する。

（手続き）

対象児の小学部 6 年生の 1 年間の指導の記録から、「自立活動」及び「音楽」の指導場面について時系列に整理し、集団への参加が難しい対象児が、集団の授業に参加するようになった要件について、対象児を指導時の担任 2 名及び音楽の授業担当者で検討・整理する。

### 【結果】

（自立活動の指導の経過・結果）

対象児と教師がやり取りするためのノートの導入：1 学期は、相手と視線を合わせることが少なく、一人で文字積木や砂場で遊ぶことが多かった。6 月からは、本児が教師に書いてほしい言葉を言い、それを教師が記入するノートを用いてやり取りをしたことで、教師の名前を呼んだり、書いてほしいペンの色を教師に視線を合わせて伝えたりするようになった。3 学期には、一人で遊ぶことが減り、教師にノートを介した関わりを求めることがさらに増え、名前を呼ばれると、顔を

上げて手を振って応えるようになった。

見通し、理解：本児専用の一日の予定表を教師が作成し、教師が本児と一緒に文字を読んで確認した。活動内容が分からないと、教師の誘い掛けを受けても「やんない。」と言って靴を脱いだり、寝転んだりしていたが、予定を教師と一緒に確認し、内容を理解することで、活動の場を共有できるようになってきた。「やんない。」と言って、活動の場を離れるときには、複数の理由があることが分かり、理由に応じて支援することにより、靴を脱いで表現することが減った。

役割、集団への参加：1 学期は、朝の会や活動を共有することが難しかったが、タイマーを使って活動を終えたり、自分のノートを持って集団の学習に参加したりすることが増えた。3 学期には、教師と一緒に朝の会の日直をするようになり、友達の顔を見て名前カードを渡すようになった。

（音楽の指導の経過・結果）

1 学期は、着席していることが少なく、歌の歌詞のスライドを見たり、楽器に触れたりすることはほとんどなかったが、唯一、「かえるの合唱」については、パソコンに映したイラストに合わせたスイッチ操作で旋律奏を行う学習には意欲的に取り組んだ。2 学期初めは、ノートを持つことで着席していることが増え、本児の側にいる教師が歌詞やリズムを示したスライドを指差すとそれを見るようになってきた。同時に教師が楽器を鳴らす様子を見せたり、本児が楽器に触ろうとするのを待ったりすることで徐々に楽器に触れるようになってきた。2 学期後半には、スライドに示した歌詞の内容について質問に答える、歌詞の一部を発声する、スライドに示されたリズムの記号を見て、教師の手で模倣するようになってきた。また、教師の指差しに応じて楽器を鳴らすようになってきた。3 学期には、パネルシアターの絵人形を操作する、教師の合図を聞いて楽器を鳴らす、歌詞の一部を歌う、自分が演奏するパートや 1 曲の始点・終点を理解して友達と一緒に演奏するようになり、主体的に表現するようになった。授業には最初から最後まで参加するようになり、名前を呼ばれると返事をする、起立一礼一着席を表す和音を聴いて起立と着席をしたり、授業の流れに合わせて取り組んだりできるようになった。また、音楽の授業で学習した歌を聴きたいと教師に要求したり、生活の中で歌ったりするなど、音楽への興味・関心が広がった。

### 【考察】

自立活動の指導内容に着目したことで、自立活動の指導における変化と相互に関連しながら、音楽の授業においても対象児の変容が見られた。音楽の授業では、視聴覚教材や楽器を見たり聴いたりすること、楽器を操作したり、身体表現したり、友達と一緒に表現したりすることが学習内容となる。本研究の結果から、対象児と教師がやり取りするためのノートを導入したこと、それを通して人間関係の構築及び言葉や身振りによるやり取りができるようになったことは、集団の授業に参加するための要件であったと考える。児童の自立活動の指導内容と関連させ、その情報を授業者で共有して授業を行うことで、児童が集団の授業で学習できる内容が充実すると考える。(YAMAJI Yasuyo, HISANO Tomohiro, KUDO Kumi)